日本語の主観性[1)]

清水　啓子（熊本県立大学、
英語学・言語学）

1.はじめに

認知言語学という言語学研究のアプローチでは、言語が表す意味は以下の２つの特徴を持つと考えます。

①言語の意味は、主体（話者）による表現対象に対する概念化に在る。

②すべての言語表現は、主体（話者）の主観的な捉え方を、程度の差こそあれ、反映している。

「言語が表す意味とは、その表現が指示する対象そのもの」と考えるのが一般的で一番分かりやすいかもしれませんが、そう単純な話ではすみません。身近な例をあげれば、例えば、ある一人の女性が、同一人物であるにも関わらず、「お母さん」「太郎くんのママ」「田中部長」「田中さんちの奥さん」などと色々な表現で呼ばれたとしても、本人は自分が呼ばれたと認識できるし、その呼ばれ方がその状況においては最も適切なはずです。当然、時、場所、相手の人によって呼び方が変わるわけですが、この発表で重要視したいのは、これら「お母さん」「太郎くんのママ」「田中部長」「田中さんちの奥さん」という呼び方は、誰のことを指しているのか（指示対象）だけでなく、誰が話しているかという話者（主体）に関する情報（子供、子供の友達やその親、職場の部下、近所の人、など）も同時に含まれている、ということです。言語表現や言語活動において、表現される対象は「客体」であり、話者は表現する「主体」となります。本発表では、1)言語表現が意味する内容には「客体」に関わる意味と「主体」に関わる意味があること、2)個別言語により「主体」に関わる情報の表現方法が異なること、3)言語に現れる主観性の日英比較の事例、について認知言語学の枠組みから順に述べてゆきます。

２.言語表現における主体と客体の分化

言語表現において、言語主体と客体は次にように分けられます。

・主体：対象に対して概念化し、言語を使って表現する者（＝話者）

・客体：概念化され、言語として表現される対象

つぎに具体的事例をみて主体と客体に関わる情報がどのように言語表現の意味に含まれるかを考えてみます。

１）宮崎は熊本の東にある。

２）酒が欲しい。（上原 2005:538）

⑴の例では、話者は誰でもよく、言語が表現する内容の中に話者は関与していません。言語主体である話者が表現される内容を外から客観的に捉える、というパースペクティヴを取っています。一方、⑵では「欲しい」と感じているのは話している話者自身であり、この場合、言語表現が意味する内容の中に話者が含まれていなければなりません。言語表現をする主体が、表現される内容の中に入り込んでいて、その状況を内部から主観的に捉える、というパースペクティヴを取っています。認知文法では前者を「最適視点状況 (Optimal viewing arrangement)」と呼び、後者を「自己中心的視点状況 (Egocentric viewing arrangement)」と呼びます (Langacker 1985、1991:317）。後者では、表現される意味の中に話者が含まれているのですが、実際の言語表現には「私は」などという語句が明示的に使われていないことが重要です。

⑵のように言葉では話者のことを何も言っていないにも関わらず、表現される内容では話者が重要な意味役割を担っている場合があり、こうした表現は「主観性」が高い、ということになります。これは英語でも同じ様なことが観察されます。以下⑶ではすべて英語前置詞acrossが使われていますが、表現される意味内容の「主観性」の程度という観点からは、(3a)が最も客観的で、(3b)、(3c)と徐々に意味の主観性が高くなり、(3d)が最も主観性の強い across の用例になります。

３）a. Vanessa jumped across the table.

b. Vanessa is sitting across the table from Veronica.

c. Vanessa is sitting across the table from me.

d. Vanessa is sitting across the table. (Langacker 1991:326-328)

(3a)では主語のVanessaが実際にテーブルを飛び越すわけで、これは誰が見ても同じ状況なので客観的です。(3b)はVeronicaを参照点としてテーブルを挟んだ向かい側にVanessaがいるという文ですが、実際には誰も移動しておらず、VeronicaからVanessaへと移動するのは言語主体（話者）の視点ですから、少し主観性が入ります。さらに(3c)では、話者が表現される状況の中にいて、その向かいにVanessaがいることを表していますが、ここではmeという代名詞が使われ、話者は自分自身を「客体化」しています。このmeは(3b)のVeronica（三人称固有名詞）をme（一人称代名詞）に換えたにすぎません。しかし、(3b)のように話者が単に概念化主体として状況の外にいるのと比べ、(3c)では話者自身が状況に直接関与しているので、表現内容の主観性は(3b)よりもさらに高くなると言えます。次に(3d)では、表現主体である話者が場面にいて「その場で」発話している言語表現で、話者自身を参照点としているのですが、(3c)のようにmeとして明示されていません。つまり話者は自分自身を客体化して表現することなく、しかしながら、表現される内容の中には含まれています。したがって、(3d)は最も主観性の高い表現といえます。(3c)と(3d)の違いは、例えば、自分自身が写っている写真をみて、その中の自分を指して(3c)を言うことはできますが、(3d)を言うことはできません。(3d)は、話者がその場にいてそこで発話しているような状況です。(3d)では話者が言語形式として現れていないにも関わらず表現される対象の中に入っている、という点が重要で、前述した「自己中心的視点状況（Egocentric Viewing Arrangement）」であり、典型的な主観的な事態把握（subjective construal）であるといえます。前にあげた例⑵で「欲しい」という欲求の在り処が「わたしは」という表現で明示されていないのと平行します。

３.主観性の表れ方の日英における違い

話者（言語主体）に関わる情報をどのように言語表現に表すか、あるいは表さないか、についてはそれぞれの言語に特有の「好まれるパターン」があり、同じよう

な状況を表す場合にも、日本語と英語では話者に関する情報の表し方が異なります。特に日本語では状況を話者との関係から捉えて言語化する傾向が強く、たとえば「動詞＋てあげる／てやる」、「動詞＋てくれる」、「動詞＋てもらう」といった、いわゆる＜ウチvsソト＞概念を表す構文は自己中心的な、主観的な状況把握を言語化するものです。

話者である言語主体が状況に直接関わる場合に、日英で差異が生じる具体例として、日本語の「内的状態述語（internal state predicates）」（上原 2005）を考えてみます。内的状態述語は、(4a)のように話者については使えますが三人称には使えません。「欲しい」という欲求を感じることができるのはその欲求が生じる身体の持ち主だけです。他人の欲求を直接知覚することはできません。ですから(4b)のように三人称に「欲しい」は使えず、「欲しがっている」という外的な様態を表す表現を使うことになります。逆に(4c)のように、話者自身の内的欲求をわざと「欲しがっている」といって、外的様態として捉えることもできません。

４）a. 水が欲しい。
　　b. 太郎は水を*欲しい／欲しがっている。
　　c. *私は水を欲しがっている。
　(*：アステリスク・マークは、その表現が容認されないことを示します)

一方、英語では、(5a)のように、言語主体を明示せずにすますことはできず、さらに(5b)のようにwantは内的欲求だけでなく、他人の欲求を表すこともできます。

５）a. *Want water. ／I want water.
　　b. Taro wants water.

つまり、英語の want は内的状態述語ではなく、「～を欲しいと思っている」という意味で使われており、その主語は一人称や三人称といった人称に関係なく明示することが義務的です。(5a)のように話者自身の内的欲求でさえも話者を I と客体化し言語化することが英語では必須で、つまり英語では常に主語を明らかにしなくてはいけない、という英語の特性につながります（もっとも、非常にくだけた口語や日記では I（一人称主語）はしばしば省略されます）。

こうした日本語と英語における話者（主体）情報の表わし方の相違については、多くの研究がありますが、代表的なものを２つ以下にあげます。

（森山2008）日本語＝「主体的把握型言語」：自己を中心とする。
英語＝「客観的把握型言語」：自己をも他者化する。
（池上2006）日本語＝「自己背景化」：自己からの「見え」のみを言語化。
英語＝「自己分裂」：見る自己と見られる自己に分化

両者とも、日本語は自己を中心とした「主観性」の高い表現が特徴的であり、英語は自己をも客体化する「客観性」の高い表現が特徴的であるとしています。以下⑹はその証拠となるような例です。

６）a. Where am I? (cf: Where is she?)
b. ここはどこですか。　（池上 2006:183）
c. ??私はいまどこですか。／彼女はいまどこですか。

(6a)の英語では、話者を I で客体化し、その I で指示される対象が存在する場所をきく疑問文ですが、 I を三人称の she にしても自然な英文です。(6b)の日本語では、話者自身は背景化して言語的に明示せず、話者のいる場所のほうを前景化してその場所がどこであるかをきく疑問文になっています。これを英語のパターンに似せて話者を代名詞「私」で客体化した表現(6c)は非常に奇妙に聞こえます（ゲームなどで自分の進んだコマの場所を尋ねる場合など、自分の分身（コマ）が実際に存在するような状況ならばそれをメトニミー的に「私」と指すのは自然ですが）。しかし「彼女」のように三人称であれば代名詞でその存在場所をきくのは自然になります。このように、話者自身が状況に含まれる場合の表現のしかたが日本語と英語では特徴的に異なります。

しかしながら、話者自身を「見る主体」と「見られる客体」という二者に、抽象的に自己分裂させることを求める英語のような言語よりも、話者自身は背景化して、話者が「現象」として直接的に知覚する内容をそのまま言語に表現する日本語のような言語のほうが、人間の身体の機能のしかたを考えると、より自然なのではないかと考えられなくもありません。自分自身の身体は一部（たとえば手やお腹や

足）を除いては、見ることができません（特に背中や顔）。私たち人間は、外界を見ているとき自分自身の眼球の動きや脳の働きについて意識していません。Leder (1990) が「後退する身体（recessive body）」というように、知覚する主体の身体自体は知覚の対象ではないからです。

「水がほしい」のような＜知覚者抜き＞の日本語文は、まさにこの知覚主体である話者を背景にして、知覚内容だけを言う文であり、主観的な把握のしかた（subjective construal）をそのまま言語化しています。こうした表現をいわゆる＜主語省略＞、つまり本来ならば意味的に存在するはずの要素である主語が＜欠落＞した文、として分析するのは、きわめて英語的な発想であり、西洋言語を基本型とする考え方といえます。

以下の⑺⑻ともに、話者の直接知覚体験をそのまま表していると見なすことができます。「寒い」や「辛い」と知覚できるのは自己の身体（感覚器官）を通してであり、話者は知覚／認知の発生する原点であるので、知覚／認知の対象には含まれず、したがって⑺や⑻のＡの発話では背景化されて言語表現には現われません。Ａの発話に対して、それに同意しないＢの発話では、その異なる知覚体験が生じる知覚主体Ｂには対比的に情報価値があるので、前景化され言語として表されています。

７）Ａ：寒い！　Ｂ：私は寒くないけど。
８）Ａ：辛い！　Ｂ：僕は辛くないけど。

対照的に英語では、この知覚主体という自己を客体化して＜主語＞として明示し、さらにどの様に知覚したのかという知覚様態が動詞で表現されます。知覚主体および知覚様態の明示（英語）／非明示（日本語）という対称的なパターンが以下⑼〜⑾に明らかです。

９）a. 外へ出ると、月が輝いていた。
　　b. When I went out, I saw the moon shining.
10）(I managed to get into the room.／私は何とかその部屋の中に入った。)
　　a. Then I saw a girl standing there.
　　b. すると女の子がそこに立っていた。

c. ??そして女の子がそこに立っているのをみた。（上原2005:543）

11）a. 彼女が家に帰ってみると、裏口のドアがこじ開けられていた。

b. She returned home to find her back door forced open.（西村 2000:153）

おわりに

本発表では、日本語と英語における主観性の表れ方について述べました。個別言語の文法は、「事態や世界を概念化し言語化する際にそれぞれの言語が好む把握パターン」を体系化したものと言えます。日本語や英語が主体と客体、自己と他者、自己と自己を取りまく環境世界といった非対称関係をどの様に言語に表しているかを明らかにしてゆくことは、日本語や英語、さらにはその他の様々な言語が描く世界のあり方の多様性を理解することにつながると思います。

注：

1）本稿は平成21年7月1日に行われた文学部学術フォーラムに於ける講演内容を簡略に要約したものです。詳細な論考については清水（2010）を参照。

主要参考文献：

池上嘉彦　2005「言語における＜主観性＞と＜主観性＞の言語的指標（2）」『認知言語学論考No.4』ひつじ書房

池上嘉彦 2006『英語の感覚・日本語の感覚』日本放送出版協会

Langacker, Ronald. W. 1985. Observations and speculations on subjectivity. In John Haiman(ed.), *Iconicity in Syntax*. John Benjamins.

Langacker, Ronald. W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar*.Vol.2. Stanford University Press.

Leder, Drew. 1990. *The Absent Body*. University of Chicago Press.

森山新 2008『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得』ひつじ書房

清水啓子 2010「日本語における主観性表現」『Language Issues』Vol.17. Prefectural University of Kumamoto.

上原聡　2005「Subjective Construal と文法構造と言語類型と：日本語の内的状態術語をめぐって」『日本認知言語学会論文集』第5巻　531-546